

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22520236

研究課題名(和文) 英国18世紀の人生の物語に関する研究：個人の経験・物語の共有・公共心

研究課題名(英文) Life Stories in Eighteenth-Century Britain: Personal Experience in Social Exchanges

研究代表者

鈴木 実佳 (SUZUKI, Mika)

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：40297768

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀の人々の日常を書きとめる欲求、コミュニケーションへの渴望、書かれたものへの愛着に注目し、特に人生の物語の提示が社会と文化のなかで果たしていた役割を考察した。それにあたって、手紙や日記や文学作品を使って、個人の自省描写や個人が自分の人生を語ることによってつくっていきこうとする人間関係に着目して、個人的記録の中にみられる社会の構成員の市民としての責任感に焦点をあてた。18世紀の社会が可能にした私的な慈善の場は、金銭を介して、自らの立場の正当性を示したり、不当な状況の是正を求める人々に判断が下される場であった。小説の中での回想の使い方について、18世紀及び19世紀の流行と変化を論じた。

研究成果の概要(英文)：This research focused on the life stories that eighteenth-century people in Britain were ready to offer both in fiction and in real life. It discussed their passion for writing down what they experienced, their desire to share the personal sentiments and their efforts to keep the records in good order. The sources it used included letters and journals in manuscripts. Among them it depended on what Georgiana, Lady Spencer wrote, received and kept. She was not a published author herself but a very educated and literary person, well-known for her charitable activities. Her charity was not institutional though well-organized by the help of capable staff. Her personal charity provided a place for unfortunate people to encounter the rich aristocrat via letters and to be judged if they deserved her attention and help. Retrospective life stories found their way in everyday life as well as in fiction, changing their styles and roles over the turn of the centuries.

研究分野：英文学

キーワード：英文学 18世紀研究 日記 手紙 女性 個人の経験 物語の共有 公共心

1. 研究開始当初の背景

イギリスの18世紀は、(さまざまな社会的変化のなかでも、文化に注目を絞れば、)印刷文化の隆盛と小説の興隆に特徴づけられ、個々人の個性が意識され、それと並行して個人と社会の関係が議論的になっていた。また新古典主義の理性の時代と言われる一面がありながら、感受性の文化の時代でもある。これらの特徴については、充実した研究が既に行われている。そのなかで、中産階級の価値観と個人の自省に注目するという文学研究で大きな成果を出してきている立場に基盤をおきながら、出版された文学的文献に媒体を限らず、日記や手紙を含めて、さまざまな書かれたものを使って文化的考察を行う余地があると考えた。

研究関心の発端は、18世紀半ばの小説家サラ・フィールディング (Sarah Fielding, 1710-1768) の作品と生涯であった。彼女は、感受性を強調する小説として読まれている作品をはじめとして、書簡集の形式を使った作品や、それも含めた連作も試み、法廷での証言あるいは芝居の舞台のような設定をもった小説 (コリエとの共著とも言われている。Jane Collier, 1715-1755) を出版した。また、教育書 (学校物語) や歴史小説 (歴史上の人物が自らの人生を振り返って語る形式) を書き、古典語の書物の翻訳にも進出するなど多岐にわたる文学的試みを行った。このように、新たなものを常に求めて著作を続けたフィールディングの諸作品を研究対象としたことで、出版物のジャンルをまたがった関心をもつことになり、彼女の文学的試みが及んだ広い範囲が、当研究の学際的関心につながった。

彼女の作とされる作品のなかに、ロンドンに創設された慈善施設の周知と擁護を目的とするフィクションがある (*The Histories of Some of the Penitents in the Magdalen House*, 1759)。このフィクションは、売春婦更正施設に収容された人々が自分の半生を回想して語るという設定をもつ。登場人物が人生の物語を語るということは、他の作品の中でもしばしば見られるものであるが、慈善の場での「不幸な者」である請願者と庇護者になりうる人物の関係に着目するようになったのは、この作品の分析を通じてのことであった。

彼女の出版の形態も、18世紀文化を考察する上で多くを語っている。彼女はさまざまな方法を試みている。(古くから行われていた) 個人的にパトロンに庇護を求め、(比較的新しい) 予約購読を募ること、著作権を出版者に売り渡すこと、という取りうる3つの方式を、彼女は作品と時機に応じて取っている。こうした方策の経緯を追っていくにつれ、書き手が「作家」となるまでの過程に目を向けることになった。それぞれの方法で彼女が交渉した人々に関心が広がっていくということもあったが、個別の研究対象の広がり

他に、当研究にとって大きな意味をもったのは、このような関心を緒にして、人生の回想を主題にすることで、出版物と出版を意図することも、実際出版されることもなかった手稿との間に、共通の問題点や相互の影響を見いだすことができるのではないかと予想することにつながったことである。

2. 研究の目的

人生の物語の共有についての考察が目的であった。つまり、人生を回想して物語として誰かに語って共有すること、著者とは限らない「書き手」が書き留めること、書き残すこと、書き送ることの意味を探ることを目的とした。それにあたり、自らの回想を提供することを決定させる事項は何か、決定した場合に、話者、書き手はどのような方法を使って物語を編んでいくのか、提供の方法は何か決定するのか、提供された物語を聞き手・読み手はどのように受け取るものであるのか、評価することは正当か、といった問いをたてて、人生の物語について考察していった。文学作品や出版された書簡集はもちろんであるが、アーカイヴでの研究 (富裕な人々の文通も対象とするが、ほかに慈善の援助を求めて困窮者たちが書き送った請願の手紙などについて) により、作家ではない人々の文書も対象とした。18世紀英国では、手紙を届ける通信網が発達し、手紙マニュアルが出版され、手紙という媒体を使って重要事項が伝えられ、手紙や日記を書くということが注目を集め、多くの人々にとって、日常生活の一部となり、あるいはそれに必要な知識や道具を手に入れて行いたいと思う憧憬や野望や欲望の対象となった。王侯貴族から困窮者に至るまで、そのような人々が、自分の人生を回顧する記録を書き残しているのも、それ自体の目的や文体について考察するとともに、文学がその現象に及ぼした影響と、その現象の文学への作用の双方、およびそうした相互作用を含めた社会的現象の総体に注目した。さらに、そのような流行、伝統を受けて、18世紀末から19世紀はじめにかけて活躍した文学者たちが、回想の物語を作品のなかでどのように利用しているのかを考察することも目的とした。

3. 研究の方法

個人が書き、あるいは個人のもとに集まった記録の特殊性・個性を、イギリスの18世紀の文化および近現代の文化に位置づけることに努めた。資料の使いやすさにおいては出版物がまさり、資料の豊富さと整い方においては、社会階層が上である人々が残しているものがまさっている。この研究では、扱いやすさにおいては困難であるものを研究の範囲に入れているので、アーカイヴでの研究を重視した。

アーカイヴの資料のなかで、傑出したものに出会い、それを中心に研究を進めることに

した。スペンサー伯爵夫人 (Margaret Georgiana, Countess Spencer, 1737-1814) の記録である。彼女は、人生の途中で夫が爵位を与えられたことにより、貴族の仲間入りをしたため、金銭的には常に恵まれていたものの、育った環境としては中産階級的な価値観も身につけていた。18世紀半ばから後半のスペンサー伯爵夫人が残したマニユスクリプト (日記・手紙・家政記録) およびそのうち部分的に出版されているものを読んで分析するということを核にして、その分析を支えるために、18世紀の日記・手紙・論説・雑誌記事・文学・説教集など (これらは出版されたものに頼る) と、それらの研究書を読んだ。前者のマニユスクリプトについては、その量が膨大であるため、また、筆跡がわかりにくい文通相手がいるため、依然として読み終えることができた部分はそのコレクションの大部分とは言えない状況である。ただし、彼女の送られた手紙のうち、慈善を求めた「不幸な者」の請願の手紙については、ある程度まとまった記録をとることができ、論文にした。イギリス、アメリカの学会での口頭発表の機会を得て、その場でのフィードバックを得て、学術論文としてまとめることができたものもあった。

4. 研究成果

研究成果がたちになったものについては、雑誌論文などのリストに挙げているので、その内容について、本研究の中心になっているものから述べ、副次的な成果についても、中心的関心との関係を述べることにする。

(1) 個人の自省描写や個人が自分の人生を語ることによってつくっていきこうとする人間関係に注目し、個人的記録のなかにもみられる社会のなかの市民としての責任感について考察した論文を発表した。18世紀の社会が可能にした私的な慈善の場は、金銭を介して、自らの立場の正当性を示したり、不当な状況の是正を求める人々に判断が下される場であった。また、富裕者と貧困者の間の会話の場である。そしてその会話は、両者の間の直接の手紙の遣り取りで保たれる。出版文化が隆盛を迎え、書簡集や手紙マニュアルの出版が行われ、書簡体小説の流行を経た18世紀半ば以降の手紙の世界は、非常に豊かである。手紙という媒体がつくる場で、慈善の請願者のなかには、物乞いの言葉を凝った物語へと発展させることができる者もいた。皮肉にも、上下関係の強い場が、豊かなコミュニケーションの場を提供し、社会的秩序の維持に貢献する手段である慈善が、平等な会話の場を提供していたということである。勿論、請願者と篤志家は、双方ともに、この関係が、名士とそれに依存する困窮者という伝統的な領主と被支配者の関係 (支配者の権威と守護、被支配者の服従と尊敬に基づき、社会階層秩序を支えるシステムの一部としての庇護関

係である) に準じているという理解がある。18世紀半ばの人々の日常を書きとめる欲求、コミュニケーションへの渴望、書かれたものへの愛着、交信を可能にした配達ネットワークの整備を象徴する手紙という媒体がこのような特殊な関係を可能にしている。請願者たちは、自分の人生の物語を提示し、それが評価される過程は、書き手 (書き手が回想した人生) が慈善の救済に「値する」かどうかを判断する過程だった。請願者たちはいかに自分が良き市民であるにもかかわらず不幸な偶然によって困窮しているかを示し、慈善の担い手は、慈善の善き行いを実践することで、自分が置かれている恵まれた環境を正当化し、そして究極では最終的な救済に「値する」人間であると示そうとしていた。 (‘Doing Justice’; ‘スペンサーの慈善’; ‘Charity, Money and the Narratives’)

(2) 手紙と情報の共有に関わる問題のなかでも、私的な手紙に書き記されているながら、公共心をめぐる意見の交換が最も頻繁にあらわれるのは、国家的危機に見舞われた場合である。そのような政治的傾向が強い側面については、スペンサーとハウ夫人 (Caroline Howe, 1721-1814) の間の文通を素材にして、アメリカ独立戦争時のイギリスの女性たちの世の中での混乱と革命的事態に対する反応を分析した。彼女たちは、支配階級に属するだけでなく、非常に特別な立場にあった。ハウ夫人は、海軍提督などの要職に就いた兄弟をもち (ハウ兄弟は彼女の実の兄弟である。彼女はハウ家に生まれ、同じ苗字をもつジョン・ハウと結婚した。) ベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin, 1706-1790) との交渉に関わった。スペンサーはその親友で、二人は毎日の日記を書くかのように手紙を交わしていた。スペンサー家では、いずれ息子 (2nd Earl Spencer, 1758-1834) が役職上ハウと同様の立場に立つことになる。 (‘Personal and Civic Concerns’)

(3) 文学の世界と、一般の人々が請願書や手紙で形成している世界との関連については、特に注意を払った。そのなかでも、「人生のすべて」を語ろうとする伝統の推移を追った。人生の最初から「すべて」を語ろうとする傾向は、あまりにも顕著であったので、18世紀半ばの文学のなかで既に茶化されている。それでも、地域で相互に見知った間柄でない人々の出会いが頻繁にあり得る流動性の高い世界、あるいは教区ごとの監視・救済の機能がうまく働かなくなっている社会では、個人が自己の歴史を自分で物語って、新たな人間関係を形成していくことが必要だった。18世紀の現実の慈善の場での請願書や文学の中で用いられてきた人生の物語を、18世紀末から作品を書き始め、19世紀初期に出版したジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) は、初期習作で

は極端なまでに伝統に従うような素振りを見せて面白みを出し、初期の出版作品では回想的人生の物語への拘りをかなり残し (*Sense and Sensibility*, 1811) 代表作のひとつ (*Pride and Prejudice*, 1813) では独自の発展をさせて巧妙に用いていることを分析した。(“Sharing One’s Story”)

(4) スペンサーの娘であるデヴォンシャ公爵夫人 (Georgiana Cavendish, Duchess of Devonshire, 1757-1806) の詩の出版や公の場に出る機会と小説の出版についての態度の取り方と、母であるスペンサー伯爵夫人の「著者」の立場に関する考え方を比較して、出版物に関する価値観を考察する論文である。非常に話題になったデヴォンシャ公爵夫人の伝記 (Amanda Foreman, *Georgiana, Duchess of Devonshire*, HarperCollins, 1998) では、彼女の心理や政治的場面での活躍、そして名門貴族の一員としての生活の詳細を追い、文才に恵まれていたことも言及されているが、文学的活動の価値についての本人の意識や公爵家での取り扱いに従って、文人を扱うのであれば作品を列挙するであろう「仕事・業績 (works)」の項では、ハーブの演奏や造園指示、家の改装仕事の注文などに文学作品が埋もれている。多くの手紙を本人も周囲の人々も書いているにもかかわらず、少なくとも残っている手紙の中では、匿名で出版された自伝的小説 (*The Sylph*, 1779) への言及を欠いている。決定的証拠がないままに、これを彼女の作とすることに問題がないわけではない。またこれを「自伝的」と考えることも大きな問題であるが、ここでは概ね彼女の作と考えられている作品に関する本人と周囲の人々の沈黙について考察した。(“Writing in the Duchess of Devonshire’s “Works””)

(5) 18世紀の茶の流行と警戒心に関わる論文は、当初、本研究とは別の研究と考えていたが、そのなかで注目した経済的繁栄と警戒感にまつわる賞賛および警戒と、悪徳としての金銭欲や物欲についての考察は、2013年1月のイギリス18世紀学会(テーマ:「信用、金銭、市場」)での発表につながった。そして、スペンサーの慈善と経済的成功に値すること、援助に値する貧者についての論文発表を計画する契機となった。(「茶の流行と警戒心: When Something Exotic ‘Singularly’ Prevailed」, 「商品と日常生活文化の受容と流入への警戒: 18世紀の茶」)

(6) 17世紀の教育に関する文献集を、解説をつけて出版することができた。これは、本研究の重点のひとつである内省的な描写と深くかかわるピューリタニズムをはじめとするプロテスタント改革者による教育書を中心に、諸文献を選定したもので、これまで個人的に手薄になっていた宗教的側面から

のこども観・人間観について考察することができた。他に、主に女性たちを担い手とする個人の知識とその伝達の様式を示す例としてのレシピブックを用いた論文を発表した。レシピブックは、手書きのノートブックのような形で、時に書物を模した形式をとって、女性たちが家庭内で書き留め、(結婚祝いの贈り物などとして)私的に伝達するものであり、そのような冊子の内容は、料理の作り方も含むが、薬として用いられたものの扱い方、作り方、養生法、療法といった医療に関わる調合法・秘策を集めたものだった。(「子どもの文化史」, 「近代イギリスの家庭の薬・薬の知識」)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

Mika Suzuki,

“Sharing One’s Story and “a Faithful Narrative of Every Event”, *Critical Survey* 26-1(2014): 59-75. 査読有 DOI: <http://dx.doi.org/10.3167/cs.2014.260105>

Mika Suzuki,

“Doing Justice in *Pride and Prejudice*” 『人文論集』64-1・2 合併号(2013): XXIX, 149-158. 査読無

鈴木実佳,

「茶の流行と警戒心: When Something Exotic ‘Singularly’ Prevailed」 『日本ジョンソン協会年報』日本ジョンソン協会年報 36 (May 2012): 14-18. 査読有

鈴木実佳,

「商品と日常生活文化の受容と流入への警戒: 18世紀の茶」 『人文論集』62 2 (2011): 63-76. 英文要旨 III-IV 査読無

Mika Suzuki,

“Writing in the Duchess of Devonshire’s “Works”” 『人文論集』61-1・2(2010): 51-60. 査読無

[学会発表](計5件)

Mika Suzuki,

“Deformity, Storytelling and Relief: The Recollections of the Possession (1690)”, *The American Society for Eighteenth-Century Studies 2015 Annual Conference*, 2015年3月19日~22日、ロサンゼルス(アメリカ合衆国)

Mika Suzuki,

“Personal and Civic Concerns: for “a proper and lasting peace”, *The British Society for*

Eighteenth-Century Studies 44th annual conference: 'Riots, Rebellions and Revolutions', St Hugh's College, Oxford, 2015年1月6日～8日、オックスフォード(イギリス)

Mika Suzuki,

'Sharing One's Story: "a faithful narrative of every event"', The Locations of Austen, The University of Hertfordshire, 2013年7月11日～13日、ハートフォードシャー・ハットフィールド(イギリス)

Mika Suzuki,

"Perhaps other people have said so before, but not one with such justice": Observation, Justice and Narrative', *Pride and Prejudice*, Lucy Cavendish College, University of Cambridge, 2013年6月21日～23日、ケンブリッジ(イギリス)

Mika Suzuki,

'Charity, Money and the Narratives', British Society for Eighteenth-Century Studies 42nd Annual Conference: 'Credit, Money and the Market', St Hugh's College, Oxford, 2013年1月3～5日、オックスフォード(イギリス)

[図書] (計 3 件)

鈴木実佳、[論文集の中の 1 章]

「スペンサーの慈善：金銭と物語」『十八世紀イギリス文学研究 5』(開拓社 2014), 250-270. 全体 316 頁。査読有。

鈴木実佳、[論文集の中の 1 章]

「近代イギリスの家庭の薬・薬の知識」『くすりの小箱：薬と医療の文化史』湯之上隆編(南山堂、2011): 112-126. 全体 160 頁。

鈴木実佳、編集解説 『子どもの文化史

英国 16～18 世紀文献集成』第 3 回 16～17 世紀文献集(17 文献 5 巻) Eureka Press, 2010) 2250 頁。

[その他]

ホームページ等

<http://web.thn.jp/mikasuzuki/>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 実佳 (SUZUKI, Mika)

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：40297768

(2)研究分担者 なし